冬季オリンピック②

・第6回オスロ冬季大会

北欧は冬季スポーツの発祥の地である。しかし、どういうわけか、北欧の各都市はそれまでの冬季オリンピックの開催地には選ばれなかった。IOC委員の投票結果は、オスロが１８票、コルチナ・デンペッツオが９票、レークプラシッドが１票で、オスロの圧勝だった。同じ日に行われた５２年の第１５回夏季大会の開催地にはヘルシンキを選んでいるので、この時に限っていえば、IOCは夏季・冬季両大会の開催地に北欧の２都市を指名したことになる。しかもいずれも、フィンランドとノルウェーの首都だった。

　第６回冬季大会がオスロで開かれることが決まると、ノルウェー・オリンピック委員会が中心となって組織委員会を作り、施設の充実に力を注いだ。ノルウェーではシーズンになるとスキー、スケートの競技大会を絶えず開催しているので、運営には自信を持っていた。したがって施設を充実させれば、オリンピックといえども、さしたる問題はなかった。

　組織委員会はスキー（ノルディックアルペン）、スケート（スピード、フィギア）、アイスホッケー、ボブスレーの４競技２２種目の変更を確認すると、後は大会をいかに盛り上げるかに全力を傾注した。国内のムードアップのために組織委員会が考え出した案が、冬季大会初のオリンピックの火の採火と聖火リレーである。

　夏季大会についてはオリンピックの火を古代オリンピック発祥の地であるオリンピアで採火し、それを開催国まで運び、開催国内をリレーした後、開会式を日にメーンスタジアムの聖火台に点火することが慣例化されていたが、冬季大会では、それが行われなかった。そこで組織委員会はノルウェー国内独自に採火し、それを国内リレーすることを思いついたのだ。

　採火の場所はオスロから北へ約２００㎞のところにあるモルダゲールの山小屋と決めた。ここは近代スキーの父、ソンドレ・ノルドハイムの生まれ故郷である。ここから聖火をスキーによってリレーしオスロのビスレット・スタジアムまで運び、最終走者は南極探検隊として有名なフリチョフ・ナンセンの孫のエイイル・ナンセンが務めるというもので、実際にその通りに行われた。

　第６回オリンピック冬季競技大会の開会式は、２月１４日にオスロのビスレット・スタジアムに大観衆を集めて行われた。参加国は前大会よりも２カ国増えて３０カ国、参加選手数は６９４人に上がった。前大会には招待されなかったドイツと日本も前年にIOCへの復帰が許されていたので参加が復活し、ポルトガルとニュージーランドが冬季大会に初めて姿をみせた。ところが、舞台が北欧のオスロでありながら、皮肉なことにこの年のオスロ地方は大会第１日の朝まで雪不足に悩まされ、大会が始まってからはスロープの氷結で四苦八苦した。関係者は冬季大会は自然との闘いであることを改めて思い知らされた。

　スキーのノルディックは地方ノルウェーとフィンランド、スウェーデンの北欧勢が強く、３位以内にほかの国の選手が入る余地を与えなかった。新設の女子１０㎞クロスカントリーは１位から３位までをフィンランドの選手の選手が独占。オスロ郊外のホルメンコーレンで行われたジャンプには１５万人の大観衆が詰めかけ、オリンピック観客数の記録を作った。この数字は夏季大会の全競技種目も含めて、いまだに破られていないといわれている。　アルペンはこの大会から複合が姿を消し、代わりに男女とも大回転が登場。その大回転と滑降の会場となったのはオスロから約１２０㎞も離れたノレフエル。

　スピードスケートでは地元ノルウェーではヤルマール・アンデルセンが１５００ｍ、５０００ｍ、１万ｍの３種目を制し、”ノルウェーの英雄”とたたえられた。

　３０カ国中１３カ国がメダルを獲得したが、上位５カ国は、①ノルウェー（金７、銀３、銅６）、②アメリカ（４，６，１）、③フィンランド（３，４，２）、④ドイツ（３，２，２）、⑤オーストリア（２，４，２）　なお、この大会では北欧式のアイスホッケーともいうべきフィールド・ホッケーに似たバンディがデモンストレーションとして行われ、スウェーデンが優勝した。